

島津忠夫氏講演

「日本文学——作品の成立と諸伝本——」によせて

浅井圭子

平成二一年九月九日、あいち国文の会主催、文字文化財研究所の共催により、大阪大学名誉教授で元愛知県立大学教授の島津忠夫氏による表題の講演会が開催された。

ご講演の主題は、「ひとつの作品がどのように作られていったか」ということで、『万葉集』から太宰治の小説にいたる各時代の作品がとりあげられ、諸伝本を読み解く研究が重要であるということであった。

鎌倉期に書写された『源氏物語』の新伝本が、平成二〇年に発見されたことにより、これまで別本系とされてきた諸本が注目されるようになったという話題から始まった。現代の作品として、太宰治の『斜陽』は、連載の途中から構想が変化しており、谷崎潤一郎の『細雪』は、連載の中断後意図的に構想が変えられたうえに改版の度に加筆されている。近代の北原白秋の歌集『桐の花』や、近世末の読本『椿説弓張月』なども成立の過程で変化している。本文が異なる本を諸本と考えることができ、こうした作品について論ずるときは、成立途中の状況変化とその背景、底本にどの版の本を用いるかということに注意する必要があるとされた。古代から中古の作品として、『万葉集』について、『伊勢物語』

と『古今和歌集』、『拾遺和歌集』について、中世の作品としては『平家物語』と『太平記』について諸伝本の解説があり、現存する諸伝本を読み解く研究は、作品の成立を考察するうえで欠くことのできない研究であるとされた。『源氏物語』の場合は、諸本研究から原型への試みは無理であろうとしたうえで、「伏線と芽」ということを目安にして長編化の構想がいつから生じたかを考えると、作者は「幻」の巻で終結のつもりであったとし、「蓬生」の巻と「関屋」の巻は紫式部周辺のそれぞれ別の女房の筆によるものか、「関屋」「蓬生」の順に成立したのではなかったかななどの説を提起された。最後に、国文学の研究には、諸本研究と本文研究との両方が、ともに重要であると説かれた。

この講演会は、あいち国文の会の定例研究会が、第一〇〇回をむかえたことを記念しての特別講演会として、長久手町文化の家で催されたもので、参加者は一〇〇名をこえ、学外からの方や地元地域の方、県外から参加された方もおられた。ご講演の後、島津先生との懇談会が行われた。『島津忠夫著作集』についてのお話や、ご蔵書を郡上の古今伝授の里に寄贈されること、「源氏の会」を始めいくつかの研究会のこと、講演の依頼が二二年の秋まで入っていることなど、お話を聞くことができた。本講演を拝聴して、書写本を翻刻し校合するなどして新しい資料を紹介することの重大さと、責任の重さを感じたことであった。